

[特集：国際フィールドワーク]

大学教育における海外フィールドワーク¹⁾

University Education and The Overseas “Field Work”

周 星

ZHOU Xing

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: zhouxing@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

Being the terminology word, “field work” originally referred to the complete investigation method used by cultural anthropology for the study of different cultures. But at present, it has gone behind the professional field of cultural anthropology, and it has been considered as well one of the field study research methods and skills in some other academic disciplines as folklore, sociology and history. In the university education of Japan, “field work” has been even become one kind of field education method or teaching method as an another approach for the students to obtain knowledge and experiences outside of their “libraries” and “classrooms”. This paper takes the writer’s teaching experiences as the case to probe into the significance of the popular acceptance of the “field work” as the teaching method in the undergraduate education in the universities of Japan. Another thing the author wants to make clear is the significances, possibilities and the relevant problems of the field work training or practice when the universities are engaged in fostering the talents to obtain the abilities of international education and international exchanges by sending them to do field work in the different cultural areas abroad.

Key words: field work, university education, different cultures, China

「フィールドワーク」(field work)とは、文化人類学(民族学)の専門用語であり、もともと、西洋諸国の人類学者が欧米以外の異国、異民族、異文化の地に赴き、現地に長期

1) 本稿のネーティブ・チェックをされた濱本保子先生に心より感謝を申し上げる。

間滞在し、地元の言葉を身に付け、人々の生活に密着し、参与観察を通してその社会や文化を適切に把握し、かつ深く研究する調査法である²⁾。イギリスの人類学者ブロニスラフ＝マリノフスキーらが1920年代に考案・実践したこのフィールドワークが文化人類学の専門分野における基礎的な方法論になってから、改善されつつあるが、20世紀50-60年代以来、様々な疑問と批判も受けてきた。それと同時に、「フィールドワーク」という用語は、現在、人類学の専門以外の様々な学問分野、例えば、民俗学、社会学、歴史学など学術の世界において、大切な調査技法の一つとして、あるいは現地研究というアプローチとして受け入れられており、次第に普及、かつ一般化している。それは多くの人文・社会科学の分野において、それぞれの「フィールドワーク」が存在することを意味している。それだけではなく、日本の大学教育においても、「フィールドワーク」を教育の手法、または教学法の一種としての活用、更に、「フィールドワーク」を大学教育の改革に取り組む動きとして、しばしば見受けられる。つまり、「ライブラリーワーク」と並行し、現場主義や野外学習を中心とする「フィールドワーク」は、知識の蓄積や物事を探求するもう一つのアプローチとして位置づけられている。本論文では、愛知大学国際コミュニケーション学部が実施していた「中国フィールドワーク」の教学実践に基づいて、教学法としてのフィールドワークが学部教育に組み込まれる意義、また、国際教養と国際コミュニケーション能力を備える人材を育成する為、大学教育における海外「フィールドワーク」の在り方やその可能性、問題点等を明らかにしたいと思う。

中国：「フィールド」としての可能性

1947年に創立された愛知大学は戦後の新制大学として、60年あまりにわたって、世界の平和を追求し続け、「国際文化大学」を目指してきた。その流れにおいて、1996年に設立された現代中国学部のあとにつき、1998年に国際コミュニケーション学部も誕生したのである。

同じ大学キャンパスにある現代中国学部の理念・構想とは異なり、筆者が所属している国際コミュニケーション学部は、欧米文化や英語教育を中心とし、日欧・日米の比較文化研究や異文化コミュニケーションを主軸とするのが、合理的かつ賢明であるとしている。だが、学部のカリキュラムには、日本・韓国・東南アジア・中国を含むアジアを重視する

2) フィールドワークを解説する著書が数多くあるが、筆者は次のものを参考にしてている。アジア農村研究会編『学生のためのフィールドワーク入門—方法と訓練—』、2005年。岩波書店編集部編『フィールドワークは楽しい』、岩波ジュニア新書、2004年。佐藤郁哉『フィールドワーク—書を持って街へ出よう—』、新曜社、1999年。杉本尚次『フィールドワークの方法』、講談社、1983年。J. G. クレイン他著、江口信清訳『人類学フィールドワーク入門』、昭和堂、1994年。

姿勢も反映されている。日本はアジアに位置し、アジアの一員として、アジア諸国の文化を知ることが必要なのである。すなわち、日米・日欧だけではなく、日中・日韓・日本とタイの間においても比較文化研究や異文化コミュニケーションがカリキュラムの中で、重要な一部分を占めている。国際コミュニケーション学部は設立当初から、国際フィールドワークを開拓すべき「新領域」として位置づけられたのである。そこで、アジア諸国の「現地研修」が大学教育にとっては21世紀のグローバル化に対応できる大学改革の一環として期待されていたのである。愛知大学では、中国語を第二外国語として選ぶ学生が一番多く、国際コミュニケーション学部の目玉といわれる「国際フィールドワーク」には、韓国・タイ・アメリカ・ドイツに加え、中国も組み込まれている。

なぜ中国なのか、「フィールド」としての中国は、いったいどのような意味を持っているのか。中国は「近くて遠い国」であるといわれるが、他の隣国と比べて、日本国民の中国に対する関心度は最も高い。これは、2000年近く続く日中関係や文化交流の歴史に深く関係しているし、現代中国の幾つの特徴や、現在日中両国がちょうどライバル関係にあることによるものである。

4000年以上の文明史を持つ中国は、漢字を発明し、日本を含む東アジア諸国に影響を与えたのは歴史的事実である。永い歴史の中、ずっと中央集権制や官僚中心制を維持してきた中国は、現在、共産党の指導・社会主義体制を実行し、日本を含む西側諸国のメディアの批判や不信を募らせている。

最近、第六回目の国勢調査のデータによれば、現在中国の人口は13億3972万人であり、世界一の人口大国であるが故に、誰かが中国人を養えるのかといった食糧問題を危惧しているのは、日本などの先進国である。やむを得ず人口の増加を抑制するために、1975年以来、30年以上続けて採ってきた計画出産政策は、中国社会の人口構造や国民の生育観念を大きく変えたが、その中の一人っ子政策が中国の人権問題の一つとして、西側の批判を浴びることになった。

中国は典型的な多民族国家であり、漢族と55の少数民族から構成され、少数民族は総人口の9.2%を占めている。中国では雲南省、貴州省のように民族間関係が安定している地域もあれば、様々な原因から、ウルムチ、ラサのように民族間関係を悪化させてしまった事件がしばしば発生した地域もある。

中国は深刻な貧富格差に直面しており、中国の緩い基準での貧困ラインに従っても、4000万人がいまだに貧困状態に陥っているのが現状である。都市と農村の間、東南沿岸部と内陸西部の間に、経済や社会発展の格差およびそれに関連する差別は、社会問題の源になっている。都市戸籍と農村戸籍の区別が国民を二分化させ、平等な市民社会の形成を妨げる。

しかし、1970年代末期に改革開放政策が実施されて以来、30年以上の経済高度成長の

恩恵で、中国社会のあらゆる側面が劇的な発展や変容を遂げつつある。2010年、中国のGDPは6.04兆ドルに達しており、日本を超えて世界2位の経済規模の大きい国になったが、一人当たりのGDPは、わずかで日本の10分の1に過ぎない。要するに、中国は現在まさに難しい転換期にあり、その転換期は長い道のと予測される。伝統的な農業社会から現代の工業社会・都市型社会・情報化社会へ転換しつつあるこの30年間、中国は約4億人の農民が都市に入って市民になったにも拘わらず、2010年に中国の都市人口は全国総人口の49.68%、国民の半数以上はまだ農民であったが、翌年、2011年中国政府統計局のデータによれば、都市人口はようやく総人口の51%を超えた。2000年のデータと比べてみれば、都市人口の比重が14.78%も上昇したことがわかる。

1990年代まで中国は「自転車社会」であったが、この20年間急速に「車社会」になりつつある。2010年、中国の自動車生産量と販売台数は、ともに1800万台を超えて世界一に達していたが、交通安全のルール作りや国民の安全意識がまだ確立されていないため、交通事故が頻発するような未熟な「車社会」しか出来ていない。

先進国から見ると、中国の経済体制改革はほぼ成功したかのように見えるが、政治体制改革は行き詰まったままなので、社会主義のイデオロギーと資本主義の経済の間に、様々なジレンマ現象が生じている。とはいえ、中国社会は明らかに価値観の多元化と自由化が進んでいることも事実であり、社会生活の民主化プロセスが着実に進歩している。市場経済の発展は法整備の支えが必要であるが、未だに中国では「人治」の状態が続いており、法治国家の国造りはこれからも長い道のととなる。

21世紀に入ってからの10年間、中国では、文化遺産保護運動が繰り広げられている。それは政府の文化政策が文化を「革命」の対象から、「保護」の対象へ是正・転換させたことを意味している。中国では、言論や表現の自由が憲法によって保障されているにもかかわらず、いまだに時々検閲をかける体制が続いている。しかし、インターネットの存在や普及が大きな変化を齎している。2010年、中国のネットユーザの数は4.5億に達した。携帯電話でインターネットにアクセスできるユーザは2.3億に達しているといわれるほどである。インターネットの普及率は34.3%になり、世界の平均レベルを超えた。中国はインターネット人口が最も多い国である。4億あまりのインターネットユーザの存在そのものは、中国のメディア環境が昔よりずいぶん改善されていることを裏付ける。

また、激しい転換期にある複雑な中国社会では、数えきれないほど無数の社会問題を抱えており、貧富の格差、官僚の腐敗、それに悪化し続ける環境問題、高い犯罪率、自殺率や交通事故など、様々な困難に直面している。

中国文化は地域性が非常に目立つ。「南腔北調」、「南船北馬」、「南茶北酒」、「南米北麵」（稲作と麦作）などの熟語が表現しているように、南方と北方の方言、交通機関、生業や飲食など生活文化の細部は、それぞれに豊かな地域性をもつ。と同時に、古代から「半月

形文化伝播帯」³⁾、シルクロード、草原の道、万里の長城、京杭大運河、海上のシルクロード、河西民族回廊、チベット-彝民族回廊、嶺南民族回廊、茶馬古道など、数多くの民族の十字路や文化の紐帯が全国の各地域や多数の民族集団を繋げている。数千年の中国史において、農耕世界と遊牧世界は対峙しながらも、様々な交流を繰り返してきた。さらに、儒教—道教文化圏、イスラム文化圏及び仏教文化圏の相互影響や重なりにより、中国文化にある程度の統一した様相をもたらしたと同時に、複雑な多様性ももたらした。春節、端午祭などを共有し、20余りの少数民族が漢民族と同じか近い形で過ごしている。一方、チベット歴のお正月、タイ歴のお正月、ミャオ族の龍船節などのように、少数民族が各自の年中行事を持つ。

地域性と方言を越えて、中国の統一を支えるのは漢字の文化である。漢語（標準語・官話）が全国に普及し、共通語の役割を担っているが、数多くの方言（例えば、北方方言、閩南語、客家語、広東語、呉語、贛語、湘語など）が存在する。様々な方言集団だけではなく、少数民族のさらなる多様な言語・文字が存在し、それぞれの地域と民族の内部に通用している。それと似ているが、日本でいう「中国料理」は、実際に巨大で中身の複雑な飲食文化のシステムなのであり、数多くのサブシステム、いわばローカル料理、地方料理や民族料理が含まれている。

日本にとって、中国は明らかに、非常に複雑で、バラエティに富んでいる異文化の世界である。以上のような複雑性や多様性があるが故に、フィールドワークの目的地、「フィールド」として魅力のあるところである。中国社会や文化のあらゆる側面からも、日本と鮮明、かつ顕著な対照となっているのがわかる。日本の「他者」として、「比較文化」の対象として、中国は日本が鑑みる、自文化を再認識させられる「国」なのである。中国が現在経験している発展プロセス、少なくともその一部は日本が経験済みで、また成功を収めたといえる。日本の経験から中国は多くを学ぶことができ、日本は現在の中国から嘗ての日本の懐かしさや「比較」できるところを見つけられるはずである。

同じ東アジアにおける日本と中国は、互いに競争しあい、構造的な国際関係においてライバルになったが、多くの点で世界に数えられる先進国日本と世界一の発展途上大国・中国は、互恵かつ相互補完的な関係にもなる。日中間の経済的な関係が益々深まっていく中、日本の技術力や資本と中国の人力、資源やマーケットなどの連携は、東アジアを牽引するパワーになれる。中国と日本の相互注目は必然的であり、両国はすでに一衣帯水で、人的交流が非常に盛んである。国際結婚、商売、留学、観光、日本を訪れる中国人は増加の一途であり、特に外国人観光客でも中国人がトップになり、その比重がさらに高まるのは明らかである。その一方、北京、上海などの中国都市では、「和僑」と呼ばれる日本人

3) 董恩正「試論我国從東北至西南的辺地半月形文化伝播帯」、『文物與考古論集』、文物出版社、1987年。

が新たな日本人社会を形成している。

要するに、多様な文化が共生する国、中国は海外実習の現場として、絶好のフィールドである。中国を現場とする「中国フィールドワーク」は、奥深く、幅広く、といった様々な可能性が予想される。

教育実践としての中国フィールドワーク

筆者は2000年4月から愛知大学に転任し、「国際フィールドワーク・中国」、(かつて「比較文化フィールドワーク」とも表された)、「フィールドワーク入門」、「生活文化論」、「中国文化論」等の科目を担当してきた。2001-2004年、それに2011年合わせて5回にわたって、愛大生を引率し中国陝西省の戸県の農村、西安市内、雲南省の麗江、大理、上海市と蘇州市および江南水郷の古鎮(周荘)でフィールドワークを実施した。中国側の西北大学、雲南大学、上海大学の日本語学部や国際交流学院(外事処)の協力の元を実現されたのである。「中国フィールドワーク」は、経費の保障や参加学生の語学力などは、現代中国学部の現地プログラムとは比較できないほど異なるが、愛知大学国際コミュニケーション学部の教育課程の一環としてなされたのであって、文化人類学や民俗学あるいは中国学の専門的な現地調査を目標としていなかった。日本人学生が自ら異国・異文化を直接的な現地経験を通して、地元の人々と接触し、コミュニケーションをとって、彼らの生活文化を理解することを目的としていたのである。このような目標設定は、日本の大学における学部教育の国際化傾向を如実に反映しており、大学生が海外の異文化体験を若干持つことが必要とされる。国際化の流れの中で、大学生の自己形成、自分探し、能力アップ及び成長の一手段としての、フィールドワークは期待されているため、方法と目的との両面で、その性格は観光あるいはホーム・ステイとは完全に異なるといえる。

参加学生の募集

「中国フィールドワーク」は、必修科目ではないため、2-3年次の参加学生を対象に毎年説明会を開いて募集する。中国語を履修していなくても応募できるが、ほとんどの学生が中国語を第2外国語として1-2年間履修した者である。「フィールドワーク入門」を受講し、単位を取らなければならない。参加者の選考は、書類審査(アンケート)及び面接審査に基づいて、熱意、自覚、健康状態、集団行動適性、対人関係及びコミュニケーション能力等を踏まえて判定し、フィールドワーク委員会の議を経て、その名簿を教授会に報告する。「フィールドワーク入門」は、リレー式の講義科目であり、フィールドワークに携わる複数の教員が、フィールドワークの基本理念、インタビューやアンケートの技法、フィールドノートの採り方、報告書のまとめ方などを講義し、さらにタイ、韓国、アメリカ

か、中国で行われていた「国際フィールドワーク」の内容を具体的に説明する。「中国フィールドワーク」は4単位の通年科目であり、春学期の事前研修、夏休みに中国での実施と秋学期の事後研修から構成されている⁴⁾。

事前研修 (seminar) とテーマ意識

「事前研修」は担当教員の講義、受講生による自主的学習及びゼミ発表等の形で行う。事前研修では、調査地域や調査対象に関する様々な情報を収集する。調査地域についての概要や基礎知識 (例えば、地理、歴史、風土) を習得し、さらにフィールドワークの実技 (例えば、地図の解読法、調査計画、調査ノート・日誌、質問票・質問項目の設定) を練習し、身につける。参加者全員それぞれの調べたいテーマを明らかにすると同時に、資料収集を含む「先行研究」を試みる。また、それぞれのテーマに対し、海外の現場で想定される問題点などをめぐって、担当教員が学生と個別相談もする。このほか、安全対策、チーム編成、簡易なコミュニケーション中国語の練習など、フィールドワークを実施する為の準備作業も着実に進めていく。無論、チームルールや現地の法律を厳守、地元の風俗習慣への尊重なども強調される。

既に実施した5回の中国フィールドワークの実態から纏めてみると、参加学生のテーマ意識や興味はとても幅広く、具体的であった。これらのテーマは、中国社会や文化の様々な側面に及んでいる。たとえば、調査地の環境、生態、生業、自由市場、家計、金銭感覚など；就職、労働、郷鎮企業、教育、医療 (民間療法)、交通事情、観光など；衣食住の生活文化：行事食、調理法、食器、調味料、台所、民族衣装、普段着、晴れ着、装身具、民家、住宅団地、家屋構造、間取り、トイレ、方位観など；年中行事、生活リズム及び祭り、宗教や民間信仰、記念日など；家族、人間関係、人生の節目 (成人、結婚、死亡) など；民具、生活道具、工芸品、吉祥模様など、多岐にわたるものであった。社会問題や民族間関係など奥深い問題意識もあれば、衣食住、年中行事、人生儀礼など生活レベルのテーマ意識も突出している。学生たちのテーマ意識はミクロ的、具体的で、繊細であり、特に細かいところによく注目している。中国の都市と農村の生活文化およびその変化、それらと日本の共通点や相違点に焦点を当てて、現場で細かいところまでの体験や調査することで、真の中国のある側面へアプローチできるようになったのである⁵⁾。

4) 2000-2003年度の中国フィールドワークは、2単位で1セメのゼミと夏休みか冬休みに海外での実施から構成された。

5) 事前研究の参考図書は、次のものを参考にしてしている。賈蕙萱、春日嘉一『日本と中国一楽しい民俗学一』、社会評論社、1996年。河合利光編著『生活文化論—文化人類学の視点から—』、建帛社、1998年。鄭麗芸『日中比較文化論—ことば・文化・芸術—』、駿河台出版社、1999年。上野和男他編『新版民俗調査ハンドブック』、吉川弘文館、1997年。岩井弘實、河岡武春、木下忠編『民具調査ハンドブッ

しかし、調査地の滞在は短く、農家や市民の自宅訪問、インタビュー調査も限られた時間しか持たない。加えて、大多数の学生が中国語の語学力を欠いており、現地の活動員や中国人大学生の通訳に頼らなければならない。ゆえにできる限り、短期間滞在で調査しやすいテーマを参加学生に推薦し、案内しなければならない。たとえば、五感のみで直接にある程度まで感知・観察できるもの、あるいは、生活文化レベルのテーマ意識など、具体的に、交通事情、食文化、物質文化、公共空間（歩行街、街並み、町の看板）、住民自宅の家具の配置、生活用具、見学スポットの民芸品や観光商品、自由市場、中国庭園、それに模様、図案、色彩等々が常に推薦される。もの（民具、生活用具や工芸品）は短期間の滞在だけでも、ある程度の調査や資料収集が可能であるので、かつての中国フィールドワーク実施期間中に収集した切り絵、扇子、匂い袋、繡花靴、布製品などは、比較文化研究を中身とする報告書の内容になったし、また、大学陳列室のコレクションにもなったのである。

海外での実施

「中国フィールドワーク」は、14泊15日間の海外実習である。選ばれた調査地は、中国文明の発祥地と言われる西安あたりとその郊外にある農村、典型的な少数民族地域である雲南省の昆明、大理、麗江。それに、中国の最も進んでいる地域と最も国際的な都市、上海、蘇州およびその周辺にある「江南水郷」の古鎮であった。これらの「現場」が選定されたのは、生の中国やその複雑さ、豊かさおよび文化の多様性をより全面的にかつ様々な角度から理解してもらうために工夫したものである。たとえば、西安郊外の戸県余下鎮のある農業村落と西安市内のある都市住民のコミュニティを選定し、日中両国の参加学生が、テーマ別に班を組んで、村民や都市住民の自宅を訪問し、聴き取り調査やインタビュー調査を実践した。また、2-3日、インフォーマントの家で一緒に食事を作ったり、お話をして頂いたり、体験・観察や参与観察のチャンスにも恵まれた。麗江古城で、ナシ族出身の住民の生活文化を中心に、少数民族のアイデンティティ、中国の民族政策なども知ることができたのである。勿論、現地に滞在しているうちに、様々な形での「フィールドワーク」が可能になる。例えば、公的機関による地図と統計などの収集及び関連出版物の入手；博物館・美術館・名勝遺跡・市街地などの見学、地元の研究者や専門家の講義・紹介を聞くことなど。また、調査票・調査カード・調査ノート・調査日誌の作成実践や使用を参加学生に勧めて、ビデオ・写真・録音・実測・スケッチなどすべての記録可能の手段を動員させる。

中国フィールドワークの実施は、夏休みか冬休みを利用したが、現地では、集団で行動

ク』、雄山閣、1985年。高橋五郎著：『新版 国際社会調査』、農林統計協会、2007年。

し、短期間であったが、食事・宿泊・外出調査はすべて共にする。昼間の観察・調査が終わって、夜の時間を利用し、ゼミを行ったこともある。参加学生が調査ノートを整理したり、お互いに調べて得られた情報を交流したりして共有することが重要なのである。

事後研修 (seminar) と報告書

現地でのフィールドワークを無事に終わらせて、学生を日本に連れ戻してから、秋学期に「事後研修」という演習科目を開講する。フィールドワークの事後研修では、忘れないうちに得られた調査日誌、ノート、カード、写真・録音テープなどの調査資料を参加学生に整理させて、さらに調査地や調査対象に関する情報を集めて、複数の参考文献を補足・検索し、それぞれの調査結果を全員に口頭発表させる。また、互いにコメント、質疑応答し、異文化の描き方も勉強する。討論の成果が報告書か論文に近いレポートに反映されるように参加学生に求め、締め切りを設定し提出させる⁶⁾。レポート・報告書の提出は、参加学生の義務であり、それに基づいて評価を受け、「中国フィールドワーク」の4単位認定の根拠となる。

調査チームの総括、参加者個人のレポート・報告書の作成などを含め、学生の自主的な研究活動に担当教員が全面的にサポートする。最後は、担当教員が責任を持って、参加学生全員のレポート・報告書をもとに、全体の成果として冊子をまとめる。それを日中両国の関係諸機関や地元関係者に配布するとともに保存する。調査対象の家庭、個人あるいはコミュニティにも還元する。このほか、写真と実物資料を学部の陳列室に簡易展示する。機会があれば、オープンキャンパスの時にも公開する。

ネット時代も百聞は一見に如かず

今の日本の大学生が豊かな社会や IT 時代に生まれ、育ったため、閲覧・閲読よりテレビの画像やインターネット等々のメディアに頼っている。日本のメディアでは、中国に関する映像がテレビでよく流され、複雑かつマイナスの中国像を既に形成させている。このようなメディア環境において、日本の若者自身、あるいはその親の影響を受けて、中国に対する固定的なイメージを持つのが一般的である。しかし、「中国フィールドワーク」の

6) 事後研修の参考図書は、次のものを参考にしてしている。住原則也ほか著『異文化の学び方・描き方—なぜ、どのように研究するか—』、世界思想社、2001年。毛利和弘著『文献調査法—調査・レポート・論文作成必携—(情報)リテラシー』第5版、日本図書館協会、2012年6月。東海大学留学生教育センター、口頭発表教材研究会編『日本語口頭発表と討論の技術』、東海大学出版会、1995年。浜田麻里、平尾得子、由井紀久子著『大学生と留学生のための論文ワークブック』、くろしお出版、2005年。早稲田大学出版部編『卒論・ゼミ論の書き方』、早大出版部、2000年。

教学実践から分かったのは、ネット時代においても日中両国の共有する「百聞は一見に如かず」という諺が、依然として正しくて知恵に満ちたものであるということだった。

今までに72名の愛知大学生（中国人留学生1名を含む）が中国フィールドワークに参加した。中国側の西北大学、雲南大学、上海大学の学生40名、教員7名が現地の活動員や通訳として、サポートしてくれた。日中大学生の全員が、生涯忘れ難い経験や思い出を得て、後悔した人は一人もいなかったようである。越境する海外教育実習としてのフィールドワークに対し、参加学生の反応・感想を総括してみると、以下のような収穫があると言える。

まず、より真実に近い生の中国を自らの体験で認識させ、中国に関する知識やイメージをより豊かにさせたのである。参加学生の言葉でいえば、「本では知ることのできない生の中国の文化に触れた」、「中国の生活を直接肌で触れ、現地の人と近距離で話げできた」、「日本人とは異なった価値観を持った中国の人々と交流を持つことで、自分自身が成長できた」など、確かに以前より、中国のことを現実のものとして見るようになったのであり、中国人や中国に対する固定観念や概念化されたイメージが見直された。中国の農村、町や都市で実際に経験した、かつて抱いていたイメージとは少し違う感じを受けて、固定観念や先入観の克服などにより、いい勉強になったとよく言われる。生の中国を具体的なコミュニティで体験し、普通の中国人（農民、市民、幹部、大学の先生や学生）と接触し、中国をより近くに感じて、中国への関心を高めたことにより、中国をもっと知りたい気持ちを持つようになって、長期留学を決意した愛大生もいた。

次に海外フィールドワークを通して、冒険的な体験やカルチャーショックを含む新鮮で多くの刺激を受けたことは、大学生にとって貴重な経験になる。と同時に、異文化としての中国との「比較」により、日本人学生は日本、日本文化の再認識や再発見がある程度できたといえる。フィールドとしての中国は、「鏡」のような価値があり、それを通して、日本人学生が自分たちの社会や文化およびその特徴や問題点を振り返ってみることが言うまでもなく大きな収穫である。たとえば、中国の抱えている様々な社会問題に対し、日本はどれほど恵まれているか、初めて気づいた学生がいる。西北の干ばつ地域に対し、日本の水資源がどれほど豊かで恵まれているかを知ったのは、その例である。多様多彩な中国文化に対し、同質性や単一性の目立つ日本文化の特徴も再認識された。このように異国・異文化で得られた体験や刺激は、自国の生活や文化を相対化させて、自文化の基準を持って異文化の事象を価値判断する傾向や衝動に対し、反省や克服する能力を養成することができる。言い換えれば、参加学生は、フィールドワークの実践を通して、自文化を再整理し、見つめ直したのである。無論、フィールドワークの実践において、参加者が「比較」の方法に限界もあると分かった。たとえば、日本人学生がいくら努力しても、中国人の農民、市民および大学の先生や学生に「お客さん」と見なされ、本当の中国人の家庭内の食

生活・「家常菜」を賞味することができなかつた点が挙げられる。短い滞在で学生たちが体験したのは、レストランの外出あるいは中国人家庭のもてなしであった。

第三に、フィールドワークの海外実践は、参加学生の自主性や学習の積極性を促進したものであり、学生の問題発見や課題解決の探求能力をアップできたと言える。現在の日本は大学の「全入」時代といわれるが、大学生生活は日本人若者にとって、高校並みあるいはその延長線上にある「通過儀礼」みたいな人生の一ステージになったのである。高校までのゆとり教育や他律的学校生活により、大学に進学しても自律的な勉学に適応しにくく、困っている学生は少なくはない。国際フィールドワークは綿密な授業計画を立てて、徐々に参加学生の趣味やテーマ意識を明らかにさせ、それぞれの課題をめぐって、いろんな形で関連資料を検索・収集させる。それから、教室での討論を通して、これらの資料を分類・分析する。海外において自ら現地で体験、観察及び聞き取り調査などを行い、事前に収集した資料を確認・照合したり、補足・訂正したりする。中国滞在期間中は、毎日、調査日誌を書かせて、調査ノートを整理させ、さらにチームメイトの間に討論を重ねて、調査の収穫・感想などを共有する。帰国後も、集めた資料・データをすぐに整理させ、さらなる「ライブラリーワーク」を引き続き行う。また、事後研修によって、各自の調査テーマをより深く認識させ、質のあるレポート・報告書をまとめて提出させる。これらのプロセスを通して、参加学生に若干のプレッシャーや責任を感じさせると共に、学習の主动性もアップできる。今までの事例から言うと、フィールドワークの報告書を卒業研究論文までに発展させる者もいれば、フィールドワークをきっかけとして、海外での現地調査の経験を踏まえて、さらに民俗学・文化人類学専門の修士課程・博士課程への進学を決意した学生も少ないが出ていた。要するに程度は違うが、フィールドワークの実践は、参加学生各自の卒業研究に取り組む時の問題を発見、理解、分析する能力を、確かに高めさせられたと実感している。

第四に、「多重」のコミュニケーションである。中国フィールドワークのキーワードは、学問よりコミュニケーションである。現場でのコミュニケーションは三種類あると思われる。一つは、愛知大学生同士のコミュニケーションである、事前研修から、海外での実施を経て、事後研修が終わるところまでが、すべてチームワークであるゆえに、チームメイトの交流が重要なのである。個々人の研究テーマが異なるか近いかはともかく、いずれにせよ相互討論や助け合いが必要で、情報の共有を徹底的にしなければならない。二つ目は、異国間の大学生同士の触れ合い、西北大学や雲南大学、上海大学の日本語専攻の学生たちは、通訳として一生懸命「お客さん」としての愛知大学生とのコミュニケーションを取ろうとしたのであり、彼らにとって、これはいい実習になり、またチャンスでもある。愛知大学生も、通訳なしにはインタビューできないので、中国大学生との意思疎通は、フィールドワークの前提となる。同じ世代の若者同士の間に関心、趣味や話題を共

有しながら、フィールドワークに臨む。時間は短いが、日中大学生が皆礼儀正しく、両国間の敏感な問題を避けながらも、一定の異文化間コミュニケーションをとったと言える。三つ目はインフォーマントとしての村人・市民とのコミュニケーションである。中国人学生たちと上手くコミュニケーションをとってから、互いに協力し合い、現場のインフォーマントにインタビューする。調査現場での通訳は、たまに日本語―中国語の標準語―地元の漢語方言、あるいはナシ語の手順で行われた。日本人学生の質問は中国語を使えば、いい機会であると言えるが、通常は通訳とのコミュニケーションを取ることが前提になり、インフォーマントの答えも通訳を通さなければならない。このプロセスは長く複雑で、調査になかなか慣れない未熟な両国の大学生にとっては、よい訓練である。特に日本人学生の内向き傾向を克服するには建設的であり、日本語を勉強している中国人学生にとっても、フィールドワークに参加して、貴重な語学実習にもなったのである。下手な外国語を実際に使う実践は、互いの異文化理解にとってプラスであり、国際交流の場面で実際のコミュニケーション能力がアップできる。

中国フィールドワークの教育目標は、あくまで文化人類学または民俗学の専門的な学術調査ではなく、日常生活レベルでの異文化を自らの体験、体得、観察及び調査の実践により、一定の理解をすることを目指している。学問的な方法論を志向としないが、一般のホームステイや観光とも違う。ゆえに、中国フィールドワークは、日本人大学生に地元の人々の生活、風土、環境、文化の伝統や現代を知り、自らの人生を豊かにするチャンスを提供する。異国、異文化の土着の知識や民間文化などを学んで、国際的教養、視野や感知力を養成する。書物、教室やライブラリの学習にプラスし、大学の学部教育においてフィールドワークのような体験、体得、観察、野外学習や実践的なコミュニケーションが重要視されるべきである。

言うまでもなく、中国フィールドワークの教育効果は独善的なものではなく、国際コミュニケーション学部のカリキュラム体系と密接に関係している。中国語の課程は無論で、特に比較文化シリーズ、言語文化シリーズ、生活文化シリーズ、伝承文化シリーズ、国際観光シリーズの課程等々は、大学生の国際フィールドワークへの参加を支えているのである。

問題点と今後の展望

中国フィールドワークは、集団的、短期間海外滞在型の実習であり、ある程度の成功をおさめたと言えるが、いくつかの問題点に直面している。2004年2月、愛大生を引率して雲南省麗江古城でフィールドワークを行った時、地元政府の文化行政部門のある役人から聞いた話であった。「アメリカからの大学生は先生の説明を聞いてから、解散するとす

ぐにどこかへ姿が見えなくなり、地元住民に溶け込んでいく。アメリカ人の独立性は高く、行動力もすごい。それと鮮明に対照になったのが日本人大学生で、いつも集団行動で、みんな儀礼正しく、おとなしいが、内向き、一人で調査ができないか、怖がってあえてしない」。フィールドの反応や見方として正しいかどうか、適切かどうかは別として、文化や教育システムの違いを除けば、確かに日本人大学生の海外実習は、極めて「安全対策」や「危機管理」を重視する。海外での調査活動の危険性を考慮し、平日や緊急事態発生時の安全管理体制に万全を期さなければならない。例えば、学生には、自己管理に責任をもって参加する旨の参加同意書（本人及び保証人のサイン入り）を提出させる。また、全員に海外旅行保険加入を義務付ける。このほか、アシスタントや現地での共同活動員を臨時に雇用し、その共同活動員は、引率教員の指示にしたがって、参加学生の現地活動の補助及び安全管理の補助を行う。参加者の自覚と節度ある行動が前提となる。参加者全員の安全意識を高めて、事前の教育を強化しなければならない。引率教員として、海外フィールドワークを実施する時、現場で最もプレッシャーを感じたのが、学生の指導というより安全管理である。如何に安全を万全に確保したうえで、参加学生の自主性や進取の気性を高めるのかは、今後の課題である。

近年、日中関係におけるトラブルの続出により、日本の大衆メディアと社会全体が、中国社会の安全性や環境などを深く疑わせている。これが中国フィールドワークの安全管理に対し、他の国のフィールドワークより、多大なプレッシャーがかかっている理由である。

急速なグローバル化と多様な文化が共生する21世紀を生きる、異文化理解のできる、かつ国際的経験を持つ人材を育成するため、今後、いろいろな困難や問題に直面することとなるが、中国というフィールドの「重要性」と「可能性」を信じて、中国フィールドワークの低迷打開には、さらなる工夫や努力が必要であると自覚し、今後も引き続き頑張っていく所存である。



写真1 陝西省戸県後寨村を調査



写真2 雲南省麗江古城の訪問先での記念写真



写真3 上海大学日本語学部で中国人学生との交流会



写真4 上海大学での記念写真



写真5 2000-2003年度中国フィールドワークの報告書